
Toward a paradigm shift: From cross-cultural differences in social cognition to social-cognitive mediation of cultural differences

Social Cognition, 19, 181-196

Rep. 脇本 竜太郎¹

序

◇近年、多くの比較文化研究により、基本的心理プロセスの普遍性という想定に対して疑問が投げかけられている。

←人の社会的環境の知覚は文化的背景に影響されることを示す知見(**Chiu, Morris, Hong, & Menon, 2000²**等)

←自己評価および自己制御が文化の中での学習の歴史を反映している可能性を示した知見(**Lee, Aaker, & Gardner, 2000** 等)



◇社会的認知を巡る 2 つの立場

- ・北米での知見の一般化可能性を疑問視する立場(レビュー; **Fiske, Kitayama, Markus, & Nisbett, 1998**)
 - ・文化差を少数の次元³に集約する立場(汎文化的アプローチ (**pan-cultural approach**); **Peng & Nisbett, 1999** 等)
- ←本研究では後者に注目して論を展開し、新しい捉え方を提案する。

◇文化心理学者は明白な社会的プロセスの文化的差異(**emic variation**)を、その根底にある汎文化的な次元(**etic dimension**)から説明しようとしてきた。

- ・このような汎文化的アプローチでは、文化を、有限の普遍的心理的次元からなる高次元空間における座標に集約する。

ex. Hofstede(1980)→40 の国を 4 次元の空間に配置。また、座標の位置と各国の環境、歴史、経済との相関を算出し、汎文化的次元と、関連する変数との関係を見出そうとしている



以降、数世代の研究者が、汎文化的次元において異なる座標にある文化の個人が、似たような社会的状況にいかにも異なる反応を示すかを立証してきた(**Fiske et al., 1998** 参照)

◇汎文化的アプローチは⁴、基礎的社会的認知の根底にある普遍的次元を特定したという点で

¹ 東京大学大学院教育学研究科(修士課程) <mailto:wavern@p.u-tokyo.ac.jp>

² 1箇所引用されている文献が複数ある場合、最新のもののみ掲載しています。

³ **ex.** 個人主義-集団主義、相互独立-相互依存、総体的志向様式と分析的志向様式など

⁴ 場所によって **etic approach** と記載されていますが同じことなので統一します。

重要な貢献をしている。

・しかし、このアプローチは唯一絶対のものではない。

→本論文および本号に掲載されている他論文では、このアプローチに対するオルタナティブである力動的構成主義アプローチ (**dynamic constructivist approach**) を呈示する。

・本論文および他論文に共通する視点は、文化差は社会的に共有された、特定の領域の文化的理論(**axiomatic assumption/cultural theory**)から説明できるというもの。換言すれば、文化が認知に影響するか否かは、関連する文化的理論がその状況で利用可能、接近可能、顕現的、適用可能であるか否かによるという考え方である。

・・・文化の認知に対する影響はダイナミックで、社会的認知の原理に媒介される

§ 今まで状況の1つとして扱われていた文化を、状況から切り離して考えている。文化の主効果→文化×状況の交互作用という発想の転換 § 5

◇力動的構成主義アプローチ

・複数の普遍的次元から社会的認知の多様性が説明できると考える点では汎文化的アプローチと同様、

・但し、文化の認知に対する影響が、文化的理論が適用される状況によって制限される、と考えるところに大きな違いがある。

→文化の主効果ではなく状況との交互作用を問題にする

→社会的プロセスの中での、社会的に共有された文化的理論の維持・変容を詳述することも同時に企図

Limitations of the pan-cultural approach

◇概念的問題

・汎文化的アプローチをとる研究者は、文化はその特性(自己観や基本的価値志向性など)によって定義されると想定する

→文化の中心的傾向の差異を説明する際には有効

ex. 欧米人は観察した行為を行為者の内的特性に帰属しやすいが、東洋人は状況に帰属しやすい←その文化の自己観や伝統的価値が違うからそのようになる、と説明

・上記のような利点はあるが、汎文化的アプローチでは文化の代表的特性に目を向けるが、文化内変動をランダム誤差として無視してしまっている。

←ほとんどの研究で文化内変動は文化間の差異よりも大きいという指摘(**Shweder & Sullivan, 1990**)

→このような大きな差異を無視して二分法を適用することは過度の一般化につながる(**Hermans & Kempen, 1998**)

←文化内変動は本当に誤差として扱えるのかという問題; 人格研究における状況間差の問題に類似

・性格心理学研究における古典的議論からの示唆

⁵ ある独立変数と文化の交互作用が問題になっている場合は1次の交互作用→2次の交互作用という転換になりますね。同号の他の論文ではこのパターンが主に扱われているようです。

- 文化内変動は、個人の文化化(enculturation)の程度の差によって生じるデータのノイズではない。性格の表現系としての行動が文脈特異的であるとすれば、文化的影響の表現形としての行動も同様に文脈特異的であるはず。
- 特定の行動文脈の中での性格の表現が基礎的な社会認知的原理(知識の活性化)によって決定されるとすれば、行動に対する文化の影響にも同じ見方ができるはずである。
 - 文化は固定的に行動を決めるわけではない。文化の影響は行動の文脈によって増大・減少したり、あるいは表現形を変えたりする…力動的観点

◇実証における問題

- ・個人主義-集団主義という構成概念は、多くの概念的に独立な要素で構成されている
 - Briley & Wyer(2001, 本号) : Triandis & Gelfand(1998)の個人主義-集団主義尺度を探索的に因子分析し、それが個性、情緒的繋がり・共有、自己犠牲、他者に負けないこと、勝利の5因子からなることを示す。また、SEMを用いて、因子間相関が無視できるレベルであることも示している
 - 文化を個人主義-集団主義を1次元で捉え、そこから現象を説明するのは困難。
- ・ある領域で集団主義的な文化が、ほかの領域で個人主義的になることがある。
 - Ho & Chiu(1994) : 中国人が、従順さ(集団主義の特徴)と自律(個人主義の特徴)を同時に重視することを示す
 - 高野・纒坂(1999) : 15の研究をレビューし、そのうちのほとんどで文化差が示されなかったり、逆方向の結果(東洋が個人主義的など)が示されたりしていることを報告。また、このような結果の説明として、日本の集団主義は文脈特異的な信念で、それが適用される文脈の範囲には制限があり、その範囲にある行動の文脈でのみ、行動を方向づけるのではないかという提案を行なっている。
 - 配分課題で、対象が友人である時は文化差が生じる(Leung & Bond, 1984)が、他人である場合には生じない(Leung & Iwawaki, 1988)という結果はこれの提案に合致するもの

- ◆このような問題から、汎文化的次元よりも、文脈・領域固有の文化的理論に着目するほうが社会的行動の文化差に対する予測力という観点から好ましいことが示唆される。

Domain-specificity of shared axiomatic beliefs

◇力動的構成主義に立つ研究者は、汎文化的次元の予測力には信頼をおかず、特定の領域での特定の行動を媒介する特定の知識構造あるいは暗黙の文化的理論を同定することに主眼を置く。

- Morris & Peng(1994) : 中国人とアメリカ人の社会的イベントと物理的イベントの帰属の差異の研究を通し、中国人とアメリカ人は、それぞれのイベントの解釈において異なった特定の暗黙の因果理論を用いている、と主張
 - 人は領域ごとに異なる因果理論を持ちうる、同じ領域の因果理論が最もよく行動を予測するという点から、これら暗黙の因果理論は相対的に独立したものだと考えられる(Chiu, Dweck, Tong, & Fu, 1997 等)

◇ある暗黙の理論は、ある文化には存在し、他の文化には存在しないかもしれない。また、双方に存在するとしても利用可能性・接近可能性が異なるかもしれない。

➤**Whorf(1956)**：ヨーロッパ人は時間を過去・現在・未来に区分するが、ネイティブアメリカンにはこの区分は馴染みのないものである

➤日本人にもアメリカ人にも権威の序列に関する理論は存在するが、日本ではそれが用いられる頻度が多いため、より接近可能性が高いと考えられる。

⇒特定の理論の利用可能性・接近可能性が異なる文化間では、その理論に媒介される動機・認知・行動に文化差が生じると考えられる。

◇すでに、動機・認知・行動の文化差を説明するために複数の領域固有の暗黙の文化理論が提案されている。

・モラルにおける中国とアメリカの差異(義務ベース vs 権利ベース)

←モラルに対する素朴理論の違いから説明;中国ではモラルは決まりきったもので人の欲求をそれに合わせるという考え方をするが、アメリカではモラルは可変なもので、個人の欲求を包含するように改変されるという考え方をする。この差異がモラルで重視される内容の差異を生んでいる。

➤**Hong et al(2001)**：上記の分析を拡張し、中国とアメリカの文化的アイデンティティの差を探索的に検討

→中国の文化は社会的現実が固定されたものであるという信念を助長し、そのため中国人は文化的アイデンティティが活性化されたとき、集合的義務へ注意が向く。一方で、アメリカの文化は社会的現実が可塑性のあるものだという信念を助長し、そのためアメリカ人はアイデンティティが活性化されたとき個人の権利に注意が向く

・集団成員の行動の原因帰属に関しても、中国とアメリカの文化差が立証されている
(Menon et al, 1999)

→主たる影響源⁶の所在に関する暗黙の理論によって生じるものと考えられる。

➤**Hernandez & Iyengar(2001, 本号)**：**person agency** と **collective agency** という2つの動機システムを想定。前者は自発的行動に対して強い内発性を示し、後者は集団によって生じる行動に強い内発性を示す。前者が強い文化では社会的行動は個人の影響の観点からよく説明・予測され、後者が強い文化では集団の影響の観点からよく説明・予測される。

◆力動的構成主義アプローチでは、文化を個人に内化された、統合的で高度に一般的な構造とは捉えない。むしろ、文化を、成員に共有された、領域固有の知識構造や表象がゆるやかに結びついたネットワークとして捉える。社会的認知の文化差を説明する社会認知的要因には、この領域固有の暗黙の理論の利用可能性・接近可能性が含まれると思われる。

Boundary conditions of cultural effects

⁶ 原文では **agency** ですが意識しました。

◇前述の通り、文化的理論は判断や反応を導く認知的道具である。この認知的道具の適用可能性は、他のもの同様多くの知識利用に関する要因(**epistemic factor**)により制限を受ける。

➤即時的な(**spontaneous**)反応を求められている時、また大きな認知的負荷がかかっている時、文化的理論に導かれた反応が強くなると考えられる(**Kruglanski & Webster, 1996**)。

→つまり、このような状況・状態では文化的理論の影響が大きい文化差が示されやすく、意図的な判断をする場合や認知資源が十分にある状態、時間が十分にある状態では文化差は希薄化されると考えられる。

➤**Zarate et al.(2001, 本号)**

特性推論の文化差が以前想定されていたよりも小さいという事実に対し、力動的構成主義からアプローチ。特性推論における文化差は、意図的な判断をする際よりも即時的判断をする際により顕在化することを示す。

➤**Knowles et al.(in press)**

認知的負荷が高いとき、アメリカ人は中国人よりも強く根本的推論の誤りを示す

➤**Chiu et al.(2000)**

アメリカ人は中国人に比べて平常時は個人的特性に帰属する傾向が強いが、時間制限がある場合には逆に集団の性質に帰属する傾向が強まる。

Contextual effects on dynamic activation of implicit theories

◇文化を、共有された領域固有の理論の集合と捉えると、ある個人は相葛藤する理論を同時に持ちうると考えられる。従って、ある状況で行動を導くのはその状況で活性化された文化的理論である。他の暗黙の理論同様、その活性化に影響を及ぼすのが状況の手がかりである。

➤**Hong et al.(2000)**

香港の中国人⁷に中国文化の象徴をプライミングすると社会的出来事の原因を外的に帰属する傾向が強まるが、アメリカ文化の象徴をプライミングすると原因を内的に帰属する傾向が強まる。

➤**Briley & Wyer(2001, 本号)**

アメリカ人と中国人の価値観における文化差は、それぞれ自文化の象徴をプライミングされた時に増大する。

➤**Hong et al.(2001, 本号)**

自発的自己概念(**spontaneous self-concept**)の文化差を検討。プライムがない状態では欧州系アメリカ人と中国系アメリカ人、中国人に差がないが、各文化のアイデンティティを顕現化すると、欧米系アメリカ人は権利についての、中国人は義務についての記述が多くなることを示す。中国系アメリカ人は、プライムされるアイデンティティに従って両方の反応を示していた。

→汎文化的アプローチが考えるよりも、文化の影響は力動的。状況の手がかりがない時には文化の影響は小さいが、手がかりにより文化的理論が活性化されると、判断や行動に

⁷ 中国・欧米双方の文化的理論を内化していると考えられる。

大きな影響を与える。

Development and maintenance of shared representations in social processes

◇構成員が文化の中で活動に参加していくにつれ、文化的理論がどのように維持・再構築されるのか記述することは力動的構成主義の大きな課題である。

➤**Fiske et al.(1998)**；心と文化の相互構成主義⁸

心は独立した、自立的プロセスのまとまりではなく、文化との密接な関係の下でのみ存在し機能するものである。

◇コミュニケーションは、文化の構築・維持に重要(**Krauss & Chiu, 1998**)

➤**Lau et al.(2001, 本号)**

コミュニケーション場面において、いかに聞き手と話し手が会話の対象について共有される表象(つまりは文化的理論)を作り上げていくかについての研究をレビュー。その観点から、文化が力動的な共有された意味のシステムとして捉えられることを主張。

同じコミュニティの者同士が会話する際には、共有された表象がメッセージの構成・理解により用いられるようになる。そしてコミュニケーションを行なう者はその行為によって共有された表象に認知的に参与する。これらのことが、伝統的な考えや信念が文化に定着するのを助けると主張。

➤**Sperber(1996)**

プロセスの中で繰り返し伝達され、最小限の変更しか受けない表象が、最終的に文化として定着される

➤**Lyons & Kashima(2001, 本号)**

文化に関連した情報は、コミュニティ内を伝播するうちに、文化的にもっともそれらしい(**culturally probable**)形に変容すると主張。ステレオタイプ情報と非ステレオタイプ情報を被験者に与え複数回再生される実験で、回数が増すにつれ、ステレオタイプ情報は保持され、非ステレオタイプ情報は切り捨てられることを示す。

Conclusion

◇私的な思考および心理プロセスは、常に文化の文脈の中で生起する。

→社会的認知の研究と文化心理学を統合することにより、社会認知プロセスの新たな理解が可能になる。

◇汎文化的アプローチが隆盛を極める中で、やはり文化の影響の力動的側面に着目する研究者もいた。

➤**Triandis(1989)**：自己を私的・公的・集合的の3つに区分し、それぞれの概念的定義が文化資源の量や利用可能性によって変わることを示唆

◇現在、移民、海外旅行、インターネットの普及などによって異文化接触が急速に増加する

⁸ 北山(1998)『自己と感情-文化心理学による問いかけ』/共立出版にも似たような議論があります。

ことで、今まで文化集団を区別していた境界が急速になくなりつつある。このような状況においては、社会プロセスを文化的二分法(汎文化的アプローチの捉え方)では捉えることができない。

◇文化心理学の主要な課題は、文化プロセスの力動的性質を捉えるモデルを提供することである。そこでは文化は空間的広がりを持ち、継時的に変化してゆく力動的かつ開放的システムとみなされる。

→この課題を達成するためには、文化心理学研究において、根源的な研究パラダイムの転換が必要となる。

<主な転換点>

- ・文化を主に **1** 文化を内化した個人が集合した静的な実体として捉えない。文化は継続的に変化し、進化していくものであると捉える。

- ・多文化性と国際化はデータにノイズを発生させるものではなく、研究計画で高度に優先されるべき重要な問題として捉える

→個人は複数の文化的理論を内化しており、どれが影響を及ぼすかは行動の文脈によって決定される。

- Hong et al.(2000)** : 複数の文化的理論を内化している個人は、文脈に応じて即応的にどれを利用するか変えることができることを示す。

- Hong et al.(2001, 本号)** : アメリカに移住した中国人は、アメリカの文化的理論を新たに内化しながら、中国の文化的理論も保持している。

◇文化間接触は、またさらなる課題を文化心理学に与えている。それは、異文化間接触による文化の変容である。

- Lau et al.(2001, 本号)** : 文化的背景の異なる者同士がコミュニケーションの際に形成する共通の表象が、その後の頻繁な使用により各自の文化の中に受け入れられ、文化的変容を起こす可能性を指摘

◇力動的構成主義は、文化心理学に社会認知の基本的原理を導入し、文化プロセスの複雑性を捉えるためのアプローチである。これは儉約性においては汎文化的アプローチに譲るが、社会認知と文化それぞれの研究者に、文化がどのように社会的認知に影響するか、またその影響がいかにか基本的社会認知プロセスによって媒介されるかを記述する共通言語を与えるものである。